記　事

例会記録

十二月例会（日本薬史学会・日本獣医師学会と合同）
平成十三年十二月十五日
順天堂大学医学部九号館八番教室

一、わが国における犬の狂犬病の流行と防疫の歴史　唐仁原景昭
一、日本の終末期医療と安楽死の歴史　新村　拓
一、フリードリッヒⅠ世の皇帝の書（一二三一年）と追補（一二四〇年）の発布とその背景　辰野　美紀

一月例会　平成十四年一月二十六日
順天堂大学医学部八号館三番教室

一、日本医史学会史　資料供覧　岡田　靖雄
一、江戸幕府寄合医師添田玄春の日々の暮らし　深瀬　泰旦

訂　正

本誌第四十七巻第二号において、五月例会に演者の変更がありましたので、左記訂正致します。

五月例会　平成十三年五月二十六日
順天堂大学医学部九号館八番教室

一、東京大学医学部とお雇い外人教師　酒井　シヅ
一、私の垣間見た近世漢方史の一面　菊谷　豊彦

例会抄録

関東大震災と横浜「関西村」の病院について

中　西　淳　朗

七十八年前の大正十二年（一九二三）九月一日午前十一時五十八分に、相模湾西部の地下二八kmを震源とするマグニチュード七・九の大地震が、東京・神奈川・千葉・静岡・山梨の各地を襲った。中でも東京市、横浜市は家屋の倒壊に続いて大火災を引き起し、わが国未曾有の都市災害をもたらした。

この震災の被害については、東京市が詳しく報じられているが、横浜市については広く知られていない。即ち、家屋の全焼六二、六〇四戸、全潰九、八〇〇戸、死者二一、三八四人、重傷者三一、〇一四人、行方不明一、九五一人で、横浜の被害面積は宅地総面積の総八割に達したという。

このように壊滅といえる情況を、神奈川県警察部の森岡二郎部長は、折から横浜港停泊中の「コレア丸」から無線電信で報じた。その電文は〝本日正午、大地震起り引続き大火災となり、全市火の海と化し死傷者何万なるを知らず。交通、通信機関不通、水・食糧なし。至急救援を乞う。〟というもので、和歌山県南端の潮岬無線局を介して大阪府警察部に午後十一時三〇分にとゞいたという。

驚いた大阪府の警察部は無線ルートを確保する一方、知事以下各課長までに緊急連絡し、救援船舶の調達手配をし、翌二日は課長以上の職員が午前六時に登庁し、大阪府臨時震災救護機関の設置を決定した。（知事は土岐嘉平氏）

大阪府が先ず行った救援は、食糧品等の輸送の外、救護班と警察応援隊の派遣である。

救護班は京浜地方に十班を派遣したが、横浜には大阪日赤の第一班（九月三日夜到着）大阪医大の第五班、府征生部の第六班で、九月十日から十八日までの間に引き上げている。活動期間がこの様に短かかったのは、昼夜兼行の劇務と設備不完全、食糧不足、飲料水の不良にもとづく班員の活動力の低下によると報告されている。

この大阪府救護班の報告と、内務省よりの要望により、大阪府は関西府県連合震災救護事務所を作り、近県に協力を訴えた。参加した府県は、最終的には、大阪、京都、兵庫、奈良、滋賀、和歌山、徳島、愛媛、高知、石川、岡山、鳥取、島根の二府十一県に達した。

この連合事務所の大目的は、①東京に三〇〇棟、横浜に二〇〇棟の組立バラック住宅の建設　②横浜市の診療施設が全く不足しているので、千人収容の臨時病院（大阪市府一府六県連合震災救護仮病院）を造ることであった。かくて、横浜市南区中村町四丁目の、現在の横浜市大附属高等看護学校周辺の地に、「仮病院」を九月二十六日に完成させ、十月一日より開院した。

住宅の方は手続きがおくれ、大阪で加工した組立建材を船で輸送、十月四日より「病院」の東側に建設をはじめ、同二十七日に完成した。四、八一三世帯、二万一八六人の被災者が収容された。この町には浴場、集会場、売店が併設され、誰いうとなく「関西村」と名づけられた。この町には大阪通、兵庫通、奈良通などの町名がつけられた。

「仮病院」の方は、木造平屋八十坪の病棟が八棟、事務所一棟　炊事棟一棟　看護婦棟一棟、倉庫一棟、外来棟一棟で、各棟に二坪の便所をつけ、全十三棟を一間の廊下でつないである。他に消毒室、屍室、自動車庫が離れてたてられた。

職員数と所属をみると、石川県（医師二）、滋賀県（医師二、看護婦二十一、事務一）、和歌山県（医師二、看護婦十六）、京都府（医師七、看護婦三十五、薬剤師四）、大阪府（医師十、看護婦三十、薬剤師等四、エックス線技手二、事務十六）、横浜市現地採用（医師四、薬剤師一）となっており総員は一五七名である。

院長は、大阪日赤外科の沢村栄美博士、副院長は大阪日赤

内科の石川芳治博士であった。開設された科目は、内科、外科、眼科、皮膚科、産婦人科、小児科、耳鼻科、エックス線科（十月四日より開始）の八科で、医師は二十七名が診療に従事した。

この病院の活動は約八十日間で、十一月二十日に神奈川県に受渡された。この間、約一万人の外来患者、一、二五四人の入院患者の診療を行っている。

沢村院長等の診療報告によると、〝特種ノ疾患著シク多数ニシテ平時ニオケルモノト明ニソノ趣ヲ異ニシ、震災ニヨル生活状態ノ激変、衣食住ノ欠陥ガ如何ニ人体健康ノ上ニ大ナル影響ヲ及ボセシヤヲ窺ウコトヲ得ベク、好個ノ参考資料トシテ後年ニ伝フベキモノト認メラレル。〟としている。

特に医師団が注目したのは、今日いうところの「心的外傷後ストレス障害（PTSD）」に相当する神経衰弱、地震恐怖症等の精神障害の多発であった。

（平成十三年十月例会）

大英図書館のスタイン医薬文書

真柳　誠

連合王国の国家図書館（The National Library of the United Kingdom）は大英図書館（The British Library）と呼ばれ、大英博物館（The British Museum）から一九七三年に分離した。その壮大な建物は、ネオゴシック建築で有名なロンドンのSt. Pancras駅に隣接して一九九六年に新築されている。当図書館のフロアー3に東方・インド部門（Oriental and India Office）があり、中近東から極東まで各地域の文献・文書が収蔵・公開されている。

Aurel Stein（一八六二～一九四三）が西域探検で将来したスタイン文書も当部門に収蔵されるが、その他の漢籍・国書は川瀬一馬・岡崎久司『大英図書館所蔵和漢書総目録』（講談社、一九九六）に載り、概略を知ることができる。しかしスタイン文書はかつて全体の約半数までしか目録に取られておらず、しかもその白黒写真のマイクロフィルムしか公開されていなかったため、これまで隔靴掻痒の感があった。

真柳は二〇〇〇年九月十二・十三日の二日間、大英図書館に訪書する機会を得た。これを機に大英図書館で調査中の中国医史文献研究所の王淑民氏にS.8289以降の教示もいただき、医薬に関連する全文書のカラースライド作製を申請し、念願をはたすことができた。

なおスタインの将来した文書は元々、大英博物館に収められていたが、一九七三年の大英図書館分離に伴い移管されている。このスタイン文書はDr Lionel Gilesが整理してS.1からS.6980までを一九五七年に目録として出版、さらに一九九二年までに日本・台湾・大陸の研究者によりS.13624までが目録化された。うち漢文の医薬文書については以下の先行研究がある。